

- ① … 第15回埼玉県第4種新人戦中央大会開催
- ② … “いい野菜”をどう育てるのか～江南南サッカー少年団・松本暢佑総監督インタビュー
- ③ …～江南南サッカー少年団・松本暢佑総監督インタビュー（続き）
- ④ …～江南南サッカー少年団・松本暢佑総監督インタビュー（続き）
- ⑤ …「子どもたちにもっと自由を。どこかに“スイッチ”はある～エクセレントフィートFC 長谷川憲司代表に聞く～
- ⑥ …～エクセレントフィートFC 長谷川憲司代表に聞く～（続き）
- ⑦ … コロナ禍をきっかけに、もっと「楽しいサッカー」と交流を～第4種委員会キッズ担当・河野雅明氏に聞く
- ⑧ …～第4種委員会キッズ担当・河野雅明氏に聞く（続き）
- ⑨ … 大会記録●県内大会 1種 ●県外大会 1種・女子・フットサル インフォメーション 編集後記

●発行/(公財)埼玉県サッカー協会 〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-21-18雁ヶ音ビル204号室 Tel048-834-2002・Fax048-834-2004 <http://www.saitamafa.or.jp/>

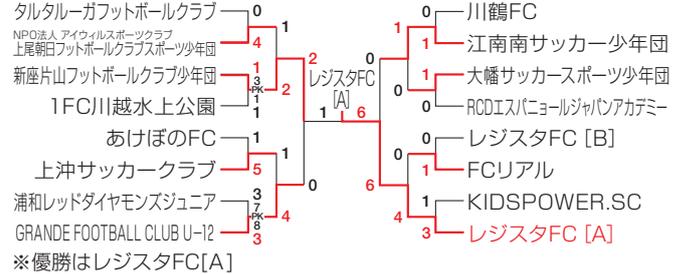
## 第15回埼玉県第4種新人戦中央大会開催

3月7日、13日で「第15回埼玉県第4種新人戦中央大会」が開催されました。コロナ禍にあって、なかなか練習がままならなかったと思いますが、参加したチームは最後までボールを追いかけられました。優勝したレジスタFC [A]も、負けてしまったチームも、そして中央大会に出場できなかったチームも、ここからがスタートです。一年かけてしっかり力をつけてください。4月からの第4種リーグで会いましょう。

慌ただしい中で大会開催に尽力していただいた役員の皆さんに感謝し、無観客という感染防止にご協力していただいた保護者、関係者の皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

### 第15回埼玉県第4種新人戦中央大会

3月7日、13日 SFAフットボールセンター他



優勝 レジスタFC [A]



準優勝 新座片山フットボールクラブ少年団



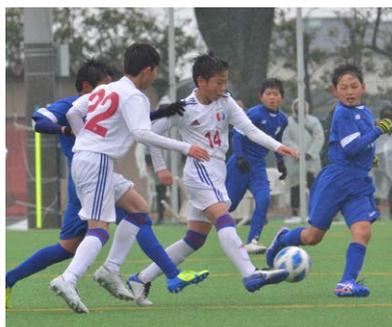
3位 江南南サッカー少年団



決勝 レジスタ [A] vs 新座片山



3位 GRANDE FOOTBALL CLUB



準決勝 レジスタ [A] vs 江南南



準決勝 新座片山 vs GRANDE

# “いい野菜”をどう育てるのか

～江南南サッカー少年団・松本暢佑総監督インタビュー

県内の指導者の皆さんが共通して抱えている想い。それは「県内から一人でも多くのプロ選手、さらには日本代表選手を輩出したい」ではないでしょうか。それを具現化した指導者の筆頭が、県内であれば江南南サッカー少年団の松本総監督と言ってもいいでしょう。県内だけでなく全国の事象にも見識がある松本総監督に自らの原点を絡めながら、現状とこれからを伺いました。（聞き手・広報委員／荒川裕治）

## 継承問題と原点

— お久しぶりです。昨年度も県代表として「JFA 第44回全日本U-12サッカー選手権大会」への出場（2年ぶり8回目）、お疲れ様でした。

松本 ありがとうございます。決勝トーナメントに残りましたが、上には進めませんでした。

さて先に、よろしいですか。私の年上の従兄弟が、今、渋沢栄一で話題の血洗島（深谷市）でネギ農家をしています。特産の深谷ネギの中でも、あの地域のネギが美味しいそうです。それこそ、十代の頃から深谷ネギを作ってきて、東京の料亭にも卸しています。

そんな従兄弟が「ネギはしゃべらないけれど、感じ取ることができる」と言うんです。彼の家は、お子さんが娘さんだけで婿養子で継ぐことになったのですが、「そろそろ暖簾を下げるか」と言い出しました。お婿さんは会社員ですから「退職したら、やってもらえばいいのでは」と勧めたのですが「できない」と言い切るんです。先程も言いましたが、従兄弟は十代の頃からネギを育てています。もう六十年くらいでしょうか。「俺じゃないとダメなんだ。（卸先に）わかってしまう」と。そういう話を聞くと、ただ土壌がいいからとネギを作ればいいのではないのです。継ぐというのは大変だなあと思ったわけです。

私が江南南を指導して36年になります。今、70歳。こちらこそそろそろ暖簾を下げるほうがいいかなと思っているところです。極端なことを言えば、この後は違う名前でも最初からチームを始めたほうがいいのではないかと考えています。先程の話ではありませんが、継ぐ人が大変ですよ。もっと子どもたちも、指導者も気軽に楽しめるほうがいいんじゃないかと。どうしても「あの人がいたときはこうだった」と比べられてしまいますし、これからチームに入ってくる子どもたち、また教えるスタッフも「江南南」という名前が必要なのか。無くていいのではないかなと思うんです。

— 県内でもチームの継承問題、さらには少子化による合併、消滅など、各チームとも様々な悩みを持っていると聞きます。江南南でもそうなんですか。

松本 この数年、いろいろと考えています。

今、監督は一期の卒業生に任せています。見てみると、どうも江南南を守ろうとしているというか、継ごうとしています。だから「お前には無理だな」と言っています。私もゼロからスタートしましたし、彼が私と同じようにできるはずがありません。彼は彼なんですけどね。

— そういう課題についても触れていきたいと思いますが、少し振り返っていただきながら、埼玉県の現状についてお伺いしたいと思います。それこそ、もう36年ですか。

松本 江南南に来る前、大里でも指導していましたから実際は40年以上になります。

私が教師になった時代、県北では児玉が強かったですね。小学生のチームにいい先生がいて、そのまま児玉高校に行くから、児玉高校も強かった。児玉の子どもたちと初めて試合をしたときには「全然違うなあ」と思ったものです。東松山も進んでいましたね。日産ディーゼルの人や市役所の人たちが指導していました。熊谷は遅かったです。スポーツ少年団ができたのは、江南町や深谷の方が早かったですね。そして、その少年団はサッカーもやるけれど、野球もや

るという複合型でした。当時、日高に高萩ジャックスというチームがあって、サッカーでも野球でも県大会に出場して「すごいな」と思ったものです。

大里の小学校に赴任したときでした。子どもたちと一緒に土日は荒川で魚取りをしたり、土手をサイクリングしたり……ある日、子どもたちと森林公園に行き、その帰り大岡小学校の前を通ったら、サッカーをしていたんですよ。一緒にいた子どもたちが「楽しそう」「ませてもらおう」と言うので、「一緒にやらせてください」と近くにいた大人をお願いしたんです。ところが、「これは学校の授業ではなく、チームでやっていることだから、一緒にやってもケガでもされたら困る。だから一緒にできない」と言われたんです。要は少年団だったんですね。チームを作らないとできない、保険に入っていないとできない、ということでした。

そこで教育委員会に掛け合い、議員さんにもサポートしてもらって、大里で少年団を立ち上げました。

— それが具体的なサッカーとの関わりの始まりなんですね。

松本 そうなんです。立ち上げたけれど、私はサッカーをしてこなかった。だから学びに行こうと思い、与野の下落合少年団にお邪魔したんです。すでに全少（全日本少年サッカー大会）が始まっていて、与野の下落合といえば、全国で優勝したチームですよ。大会のパンフレットで見たときには「確か、埼玉のチームだよなあ」と思ったことを覚えています。とにかく行きました。

あの日、与野までの行きはよかったですよ。熊谷駅で集まって、ワイワイ言いながら電車で向かいました。でもそれが、帰りはホントに静か。熊谷駅に着いてから言いましたよ、「俺、辞める」って。子どもたちに申し訳なくて今日は楽しくなかったから」と。というか、子どもたちが負けて戻ってくるのが嫌だったんですよ。

アップのとき、下落合の子どもたちは当時流行ったコーチャープラックを履いていて、試合でもそのままなんですよ。コーチャープラックはサッカーシューズではありません。「舐めてるな」と思ったものです。ところが下落合少年団の子どもたちはそれでも上手かったですよ。それまでキック&ラッシュのサッカーしか見ていなかったのですが、すごく丁寧にワンツーをするし、サッカーそのものが力任せじゃなかった。そもそも荒っぽいスポーツだと思っていたサッカーが「こんなに連動感のあるスポーツなんだ」って知ったんです。上野先生（匡氏・与野下落合サッカースポーツ少年団顧問）が指導されていたサッカーに感動しました。あれが私の原点です。でも負けて、私が悔しかった。

少年時代の私は、もともとは野球をしていました。それもピッチャーでした。1球ごとにベンチからサインが出るチームで、右肩に疲れが残る日々でした。それがサッカーは自分で考えて、自分で判断していいじゃないですか。その楽しさを知っちゃったんです。ただ子どもたちの方が上手いので、いつも遊ばれちゃう（笑）。でも、それが心地いい疲れだったりするんです。

とにかく、下落合少年団は上手くて、かつ楽しそうにやっていたことも印象的でした。



松本 暢佑 総監督

—下落合少年団を目指して、ここまで来られたんですね。それにしても江南南の話になりますが、全少の県大会7回優勝されたのはすごいことです。

松本 18名がプロ選手になりました。うれしいことです。彼らが熊谷に戻ってきて、チームを作ってくれたらと思ったりもしますね。

## 「浦和の子は浦和」

—それは目指すところではないでしょうか。さて、長く指導されている中、近年県内の4種で感じられることを伺いたいと思います。

松本 最近、浦和の少年団は結果を出していないようですが、でも彼らの試合を見ていて思うのは「浦和の子は浦和」。素材はいますよ。浦和という街の中にいい選手、たくさんいます。一生懸命やっているというのではなく、生活の中にサッカーがあるんですね。指導者である大人たちが、それに気づいていないのか。外から見れば本当にすごいことです。家の中には両親のよさ、すごさがわからないのと一緒にしょうか。恵まれていることに、なかなか気がつかないんですね。レッズやアルディージャも、遠くから選手を連れてきますが、中にいるんですよ。あとでも話をしたいと思っていますが、その子の生活エリアの中に、その子にとっていいサッカーができる環境があるといいと思います。

一方、レッズ、アルディージャも見ていますが、私から見れば、まだまだ本気ではないと思うのです。先日のU-24日本代表戦で活躍した三好（康児選手。ロイヤル・アントワープFC/ベルギー）、板倉（滉選手。FCフローニンゲン/オランダ）、そして三苫（薫選手。川崎フロンターレ）。彼らは川崎フロンターレU-12で、小学生のときから上手かったですよ。

レッズも高橋峻希（柏レイソル）、山田直樹（湘南ベルマーレ）、矢島慎也（ガンバ大阪）、武富孝介（京都サンガ）、岡本拓也（湘南ベルマーレ）など輩出しているのに、トップチームで使ってもらえなくて外に出てしまっています。

フロンターレは、小学2年生、3年生でセレクションをしています。そこにトップのスタッフも加わりますからね。そこに本気を感じるので。また、フロンターレのコーチは気持ちがいい。

ある大会で前日に入ると、グラウンドが人工芝だったので翌朝早く起きて、少し慣れさせてもらったんですね。そこにフロンターレのコーチたちが現れて「一緒にボールを蹴ろう」と言ってくれたんです。「こ蹴るといいよ」とか言いながら実際に蹴るところを見せてくれましたし、上手くいけば褒めてくれるし、上手いかなかつたら「次に会うまでに蹴れるようになるといいね」と声をかけてくれたんです。実際、なかなか会えないのですが、「次に会うまで」と言われた子は、一生懸命練習するんですよ。これがうれしい。子どもたちにとっては、励みになる一言なんです。こういう素敵な大人に出会えるといいですね。

こっちは試合に負ければ未だに椅子を蹴り上げてしまう70歳。

25歳からここまで懲りない大人ですが（笑）。

—子どもたちが負けるのが、今でもイヤなわけですね。でも、当たり前だと思えますね。

しかし、フロンターレのスタッフたちはオープンマインドですね。

松本 もちろん、レッズにも素敵なお大人はいます。池田伸康さん（浦和レッズユース監督）は、元気（原口元気。ハノーファー96/ドイツ）の話ですが、なかなか身長が伸びなくてスランプになったとき、一緒に遊んでくれたそうです。レッズは食事の後に必ず休み時間を入れるのですが、そんなときに元気は池田さんにボールをぶつけていたと言います。「ぶつける」というのは、元気としては「一緒にボールを蹴ろう」というメッセージなんです。普通ならば指導者としては、そこで「しっかり休め」と言うところでしょうが、池田さんは敢えて一緒に蹴ってくれたそうです。そういうのがありがたいんです。名取さん（篤氏。浦和レッズジュニアユースコーチ兼スカウト）からは「（まだ身長が伸びなくても）大丈夫だから」と声をかけてもらって、安心できたのです。元気は、そういういい大人と出会って、今があるんです。レッズもアルディージャも、「いい野菜」を買ってくるのではなく、「いい野菜」を作る人を育ててほしいですね。

出会いという面では、昔、一度「清水を見に行こう」と思って、綾部さんをお願いして堀田先生に会いに行ったことがありました。平日のナイターでの練習を見せてもらいました。

18時から一時間、小学生のトレセンがあって、当時清水東高校の勝沢先生（要氏）が6年生のGKにボールを投げて指導していました。19時から中学生のトレセン、そして20時から高校生トレセン。4種から2種までのトレセンが同じ場所で行われていました。

—いわゆる清水のスペシャルトレセンですね。

松本 そうです。トレセンに集まった子どもたちのことを、種別を超えた多くの指導者が見ていました。「種まき」ができていた時代ですね。指導者も地域の中の「同土」だったからできたことです。それが、今はJリーグができ、営利団体が絡んでくるようになってしまいました。

—しがらみができてしまったということですね。それをどう乗り越えるかは全国的な大きな課題だと思っています。ただ、同じグラウンドで違うカテゴリーのトレセンが次々に行われているというのは、やはりいい環境だと思います。もう10年以上前に、初めて江南南の練習にお邪魔した際、隣でクマガヤSC（3種・クラブ）と一緒に練習していました。あれは他ではなかなか見ることでできない光景でした。世代を超えて、お互いいい刺激を合える環境というのは、作っていいと思いますね。

## 全員が試合に出ることができる環境を

松本 特に下から上を目指す中で目標が近くにあるというのは、いい刺激だと思います。それはまた、指導者も同じです。

それでも今、上手い子どもたちにとってはいい時代になりました。



ただ、そうでもない子どもたちがサッカーのできる場、続けられる場が少なくなってきたような気がします。全員が上手いわけではないのです。小学生、中学生の間は、自分の力に合ったチームで、同じようなチームで対戦できるような環境があるといいのではないのでしょうか。

すでに東京都の4種リーグはランク分けをしています。確かに上手い選手、チームでのリーグ戦は理解できます。実際、ウチは小6の子どもたちだけで出ている試合で、相手チームが3年生や4年生も入れてなんとか8人ということもあります。真剣勝負をすると大差がついてしまうこともあります。

ただ、例えば県を1部、2部、3部と分け、さらに関東リーグと整えていくと、どうしても昇格するために「勝つサッカー」を求めることになりませんか？「子どもたちのために」作ったリーグ戦なのに、自分たちのランクを維持するようなサッカーになってしまうのでは、意味がないと思うのです。そこをどうするのか？

また今は一つのチームから複数出せるようになっていきます。これはいいことだと思うのですが、複数出すということはその分指導者が必要になりますし、帯同審判も必要となります。少年団でボランティア組織ならば保護者をお願いすればできるかもしれませんが、営利団体だと費用がかさむことから、仮に複数出せる人数がいても取って出さないというチームもあります。そういう整理も含めて、どういう環境がいいのかを考えていく必要があると思います。それもお互いの顔を見ながら、議論して誰もが「子どもたちのため」と納得できる方向性を示したいものです。

強化も大切ですが、例えばチームに何百人もいても、全員が試合に出ることができる環境を作ってあげることが大事なような気がします。

— ヨーロッパや南米では、自分の能力に合わせたチームを選ぶことができます。それが日本ではなかなか選ぶことができる環境になりません。子どもよりも、指導者が負けたくない、勝ちたいという気持ちを強く持っているからでしょうか。また少年団が地域に根付いているだけに、地域を越えた子どもたちの移動、移籍ということに違和感があるのかもしれません。とはいえ、冒頭の話ではありませんが、少子化の問題で消滅、合併など、サッカーそのものの活動環境が大きく変わろうとしています。だからこそ、一つのチームの存続問題ではなく、地域……人口の多い県南と東部、西部、北部は違いますが、将来構想として検討に入る時期になりましたね。もちろん、子どもたちのことだけでなく、有償無償で関わっている指導者の皆さんのことも含めてです。

**松本** 指導者の「見る目」は大事です。逆にいえば、どのチームもかもしれませんが、欠けていることです。目の前の子どもをしっかり見てあげる。これができる指導者を育てなければなりません。

最近、「週8」という言葉が聞こえてきます。チームの練習とスクールで毎日サッカーでも「週7」ですが、「週8」とは、1日でスクールの掛け持ちをすることで「週8」。子どもたちは練習をしているというよりも、スケジュールをこなしているんです。また指導者は、何を教えるかが問題ではなく、時間通りに終わらせることが第一になっているようです。そういうことでは、やはりいい選手は育てられません。

— 週8。スクールを含めればサッカーのできる環境が選べる地域もありながら、そうでない地域もあるんですね。そういう、いろいろなことを含めて、今の県内における4種のサッカーをどうご覧になっていますか。

**松本** 本常に下落合少年団の子どもたちのサッカーは難しいことをせずにシンプルにボールを動かすことが得意で上手かった。スムーズにパスしていました。衝撃的でした。あと小野選手（伸二。コンサドーレ札幌）にも衝撃を受けました。彼が沼津選抜の一員で埼玉に来たときに対戦しましたが、ボールを持って無理しないんですよ。相手が飛び込んでくると交わり、待っているのであれば突っかけていく。そのプレーはもう大人でした。元気（原口）もそうでしたが、

そういうことができる選手はいるんです。

それが、埼玉で対戦していると「(ゲームを)作るサッカー」ではなく、「(ゲームを)壊すサッカー」をしているチームがあります。相手にゲームを作らせず、やり



たいことを壊して、その隙を狙うのです。だからいきなりペナルティエリアの中に蹴り込み、まだ4種年代だとミスが多いですから、そこを突いてきます。確かにパスを繋ぐことは、ミスをしてしまうリスクが高いのですが、やはり4種年代から「作るサッカー」をしていかなければ、子どもが成長しないと思うのです。ここをなんとかしていかないと。「壊すサッカー」をしていたら、小野くんや元気のような選手は出てこないでしょうね。

— チームの勝ち負け以上に、子どもがサッカーを続けていくための基礎を作ろうという意識をもっと高めないといけないということでしょうか。

**松本** それが「子どもたちのため」だという共通した考えになるというのですが。

あと県内というか、4種の試合環境について一つだけ。全少では、一人審判で行っています。それもユース審判の一人審判。全国大会ですので、ゲームそのものの展開が早いこともあり、残念ながら一人ではコントロールできません。限界です。やはり副審もつけていただきたい。全少は実験の場ではありません。

— 8人制になって、今まで以上に縦に早いですね。経験の無いユース審判には負担が大きいと思います。審判と選手、審判と指導者という関係も含めて、もう少し丁寧さがほしいものです。

さて、他種別について、思うことはございませんか。

**松本** うーん、自分ところの草むしりだけで大変ですからね（笑）。でも、中学、高校年代の指導者ともつながって、みんなで育てることが必要なんですよね。残念ながら、私自身、熊谷市内の高校の指導者との接点はありません。やはり、先程の話じゃないですが、人のつながりが大事ですし、それで子どもたちは「いい大人」になっていくと思うのです。そういうところで、県内であれば、レッズやアルディージャのJクラブがリードしてくれるといいですね。

そう、レッズやアルディージャの4種は勝っても負けてもスタイルを変えないでほしいのです。ただ「負けたくない」サッカーをしているように見えます。やはり埼玉の中で、レッズとアルディージャにはいい見本になってほしいですね。いいサッカーをしていけば、自然と目指すものです。フロンターレや（横浜F・）マリノスとかは、強い個性、「色」を持っていて、負けてもブレませんからね。

それで他種別についてですが、レッズのジュニアユースが熊谷にもあったら、よかったなと。元気は、毎回熊谷から与野へ通ったわけですよ。話にも出しましたが、身長が思ったように伸びずに悩んでいたこともありましたが、もし、レッズのジュニアユースが熊谷にあったならば、グラウンドへの往復の時間は大幅に短縮できたでしょう。成長期にもっと睡眠も取れたら、身長が180cmを超えていたかもしれません（公称、177cm）。180cmを超えていたら、もっと……と思うんです。県内の子どもたちのために、それぞれの生活圏の中、車で30分程度の範囲の中でJクラブのアカデミー、せめてジュニアユースがあったらいいなと思いますね。

— 県内にJクラブのアカデミーが複数あったほうが良いということですね。

**松本** 選手が引退した後の雇用にもつながりますし、それが全県的なレベルアップになると思います。

— 子どもたちの成長は待ってられません。県内において「いい環境とは何か」を技術委員会が中心になって、検討してもらいたいです。またお話を聞かせてください。ありがとうございました。

# 「子どもたちにもっと自由を。どこかに“スイッチ”はある」

～エクセレントフィート FC 長谷川憲司代表に聞く～

この10年で急激な躍進を続けているエクセレントフィート FC。さいたま市岩槻区でチームとして活動をしなが、県内外で「キャストスピードトレーニングスクール」を展開し、育成年代の指導に励んでいる長谷川憲司代表に話を伺いました。（聞き手・広報委員／荒川裕治）

## ハワイからのスタート

—そもそも、どのようなきっかけで指導者の道に入られたのでしょうか。

**長谷川** 大学時代からアルバイトしていたテレビ局の下請け会社に就職したのですが、もともと海外で仕事をしたいと思っていました。父親が長く単身赴任でしたが、東南アジアで仕事をしていたことに影響されていたんですね。1996年、25歳でハワイに移住しました。語学学校に通いながら、日曜日にグラウンドに行って社会人チームでサッカーをするという日々を過ごしていました。ある日、語学学校の友人が「審判できますか」と声をかけてくれて、日本人中心の少年チームに関わったのが最初でした。もちろんボランティアです。大体100人規模でそれなりのチームでした。



長谷川憲司代表

—当時、ハワイのサッカー事情はいかがでしたか？

**長谷川** オアフ島だけです。U-12でいえば、競技志向のチームが男子だと20～25、女子は少し多くて25～30くらいでした。ローカルルールで3点以上差をつけてはいけないとかあるんですよ。そんな中で、より競技志向の強いクラブチーム（Powder Edge SC）を作ることになり、そこから本格的に指導者になったんです。

—しかし、学生 VISA しかお持ちじゃなかったんですね。

**長谷川** その通りです。浦和南から一浪して明治大学へ進み、日本史学を専攻したことが、ここで生きました。コーチをするだけでなく、ハワイと日本の歴史を教える教師という立場で就労 VISA を申請しましたら、就労 VISA が降りたんです。ただし、月給8万円からのスタートでした。

—そこでボビー・ウッド選手（FW／ハンブルガー SV・ドイツ。元アメリカ合衆国代表）と大崎玲央選手（DF／ヴィッセル神戸）に出会うわけですね。

**長谷川** 二人とも、クラブの指導だけでなく、個人レッスンもしていました。月給8万円でしたから、そういうところで収入を得ていました。

あと、ハワイにいた時期、2003年に仲西先生（駿策氏・元埼玉県サッカー協会理事長）が団長でU-12の埼玉県選抜が遠征でいらっしたので、その現地コーディネートをしました。原口元気選手（ハノーファー96）たちがいましたね。そういえば、ハワイの保護者たちから「日本の子どもたちはどうしてこんなに上手いの？」と聞かれたのが印象的でした。

これがきっかけとなって、2004年の埼玉国際ジュニアサッカー大会に「ハワイ州選抜」として招待していただき、さらにハワイ州サッカー協会の少年連盟の理事に推挙していただくなど、いい経験をさせてもらいました。

その翌年の暮れに帰国しました。VISA の関係で戻ることにしたのです。

## 個へのアプローチ

—仲西先生のハワイ遠征は覚えています。そういうつながりがあったんですね。さて帰国して、どうされたのでしょうか。

**長谷川** 自分を売り込んで回り、『英語で教えるサッカースクール』を立ち上げました。スポンサーをいただきながら約1年、やりました。ただ、一人でやる限界を感じましたね。とにかく一人でしたから、自分が行かなければスクールにならない。かといって、人材育成もままならず。ビジネス的に頭打ちになり、ここからの展開が見えなくなりました。そこで閉めました。

そこから個人レッスンの専門を始めることにしました。運良く、横浜の12歳の子どもに指導する機会をいただきました。近々校内のサッカー大会があるので、ボールを上手く蹴ることができるようにしてほしい、という要望でした。会ってみたら、そもそも走り方もよくなくて、そこも合わせて指導しました。結果的に1年くらいマンツーマンで指導したことで、いろいろ考えさせられました。走り方も大事だということ、それ以上に少人数、1人から6人くらいまでのトレーニングは大事だなと。そういうスクールって埼玉には無かったんです。

2006年に埼玉のスクールがスタートしたのですが、そのお手伝いすることになり、週末は個人レッスンをしながら、空いた月曜日に走りに特化した「キャストスピードトレーニング」も2008年に始めました。チームを立ち上げることにしたのは2009年の暮れ。埼玉での指導が三年過ぎてから、そこで最初に教えた年長クラスだった子どもたちが3年生になったのを期に保護者の皆さんから要望をいただいたものですから。対象は小学生で、ここから今の形になりましたね。

—マンツーマン、個人指導……サッカーは集団スポーツですから、なかなかそういう発想は出てこないですね。

**長谷川** そのときに自分の強みは何かと考えたのですが、これまでの指導がオーダーメイドだということでした。

というのは、ハワイで個人レッスンをしていた大崎玲央選手が、一時帰国したときに横浜F・マリノスのプライマリーを受験して、入ることになったのです。振り返れば、あのときにそのままハワイのチームにさせるよりも、マリノスのアカデミーというのはいい環境だからそのほうがいい、「外に出そう」と決めたのです。それが今のクラブ理念になっています。またその一つ下にボビー・ウッドがいました。彼の父親からは以前から「レベルの高いチームへ移籍させたい」という相談もあり、やはり彼にも個人レッスンをしたらトップレベルの選手に成長してくれて、カリフォルニアの強豪チームに移籍させ、アメリカ代表にまでなってくれました。

この二人に関しては、とにかく彼らのよさを伸ばすことを意識して指導した結果です。特にボビーは一度ボールを持ったら、とにかく離さないんですよ（笑）。「なぜ？」って聞いたら、「ボールが戻ってこないから」と。パスを出しても味方がボールを取られてしまうということでした。ならばと「自分でボールを取られないよう工夫しろ」と指導しました。パスフェイント、キックフェイント……。そんなボビーが唯一パスを出していた相手が大崎でした。

正直、彼ら二人が抜けたことは、チームにとっては大きなマイナスでした。でも、そこで留めたら彼らに可能性が広がりません。逆に、いい選手がいなくなっても、他



の選手にチャンスが回ってくるのです。他の選手も成長してくればいいのです。エースと呼ばれるいい選手が抜けた後でも、いいサッカーをして勝つ。それが、今のクラブとして目指しているところです。

#### クラブ理念

日本には、Jリーグ・サッカーのプロリーグが存在し、トップチーム以下、育成下部組織が存在する。我々の使命は、クリエイティブで質の高い選手育成を実現し、Jリーグの下部組織に選手を輩出することを目的として、日本のサッカー界の末端において、努力をすることである。また、ジュニア・ジュニアユース年代の育成に特化し、将来、日本のサッカー界および世界で活躍できる選手の育成を目指す。

## 上手いかなければ戻ることもあっていい

**長谷川** 現在、エクセレントフィート FC からレッズ、アルディージャのアカデミーに所属している選手が17名います(2021年3月時点)。累計で47名の選手が移籍を果たしました。そのまま順調に伸びてほしい、成長してほしいと願っています。

ただ、仮にウチよりもいいチームに移籍して、上手いかなければ戻してもらいたいと考えています。ヨーロッパだと自分が試合に出場できるチームに移籍できるんですね。いいチームにいれば当然レベルは高いわけです。上手いかないこともあります。ただ、上手いかないことが続くとチームだけでなく、サッカーそのものを辞めてしまうこともあります。それはもったいないじゃないですか。だってウチに戻れば、またエースでいられます(笑)。またやり直せばいいんです。実際、そういう子どももいます。移籍するチーム間でギクシャクはないですよ。だって、その子どものために指導しているんですから。

—子どもにとっての環境は様々でいいということですね。実際、どのチームに行ったから、どの指導者と出会ったからプロになったというのは、結果論です。また、確かにレベルの高いチームに行けば、壁にもぶつかるでしょう。

**長谷川** 小学生の彼らは、3年生や4年生になるとJクラブなどのセレクションを受けて、ステップアップしていています。ただ、近年では「Jクラブはジュニアユースからでもいいのでは?」「ここで6年生まで鍛えよう」という考え方になっている子ども、保護者が増えています。

—実際、指導現場で意識していることはなんですか。

**長谷川** ウチでは「攻撃は自由だから」と言っています。ただ守備に関しては連携が必要だから声かけも大事にしっかりやろう、と言っています。

県内でも県外でも、いいチームと対戦させてもらっていますが、平均して上手いと思う選手が揃っているチームが多くなりました。逆に強烈な個性を持った選手がいないんですね。思うに、もっと強烈な個性を持った選手を輩出するには、もっと子どもたちを自由にさせるべきではないでしょうか。一番いいのは自発的に考え、動いてくれることですが、できないのであれば提案するなど引き出すことが必要だと思います。

例えば、今の6年生(2021年3月時)はホントに負けていません。なぜ負けていないのか? 戦術的な話は一切していません。ただ、ボールを取られた場面を振り返り「どうしてボールを取られたのか考えようね」と言っているだけです。

あれこれ言うと、やはり子どもたちは控えめになってしまいます。見ていると、子どもは子どもでどこかに“スイッチ”があるんです。ですから、ウチではできるだけ放任です。だから、子どもによってかける言葉も違いますね。

—どうすると本気になってくれるか、ですね。結局「やらされている」と思うと受け身になり、いつまで経っても“スイッチ”が入らないこと

もあります。確かに、子どもたちには一人ひとりが自発的に考えて動いてほしいものです。

## 埼玉の子どもたちは強い。そこに上手さを

**長谷川** 今、Jクラブをお願いしたいのは子どもたち、移籍を果たした選手とその保護者の皆さんが「(チームに)入れてよかった」と思う環境を整えていただきたい。常に憧れの場であってほしいのです。赤とオレンジのチームが埼玉のツートップであってほしい…。また指導者の皆さんには、勝たなければならないプレッシャー、育てないといけないプレッシャーなどあるかと思います。もう少し、一人ひとり、つまり『個』の能力をさらに育ててほしいものです。『個性』を持ってJクラブに移籍したのでから…。人間を扱う仕事ですから本当に難しいです。繰り返しになりますが、上手いかない、伸び悩んでいるのであれば、こちらに戻すという選択肢もあっていいのではないかと思います。ときには選手の入替は1年毎でもいいのではないのでしょうか。

そんな中で、埼玉県第4種リーグですが、そろそろレベルに応じて、カテゴリーを分けてもいいのではないのでしょうか。指導者仲間の共通の意識は、埼玉県からプロ選手を出したいということです。ウチからだけではなく、他のチームからでもいいんです。一人でも出てくれると嬉しいです。他県を見ていて思うのは、東京や神奈川の子どもの上手いです。対して埼玉の子どもたちは強い。ここに上手さをどう乗せるかです。せつかくのリーグ戦ですから、子どもたちの成長を促すような仕組みを検討してみたいかがでしょうか。

—目指す先が、埼玉の先にあるような気がしています。

**長谷川** 結果、埼玉を強くしたいんですね。それも高校サッカーです。高校サッカーは日本の文化。あの舞台上で活躍できれば、なにかが起きます。

南高出身ということもあり、やはり埼玉の高校にがんばってほしい、個人的には、できれば浦和の高校にがんばってほしいと思っています。ウチの選手が南高に入って活躍してくれることが願っていることです。そう、やはり埼玉なんですよ。

—やはり埼玉なんですよ(笑)。

**長谷川** 今、週1回ですが、南高でフィジカルトレーニングを指導しています。

あとは……ウチだって勝ちたいですよ。でも、送り出すことが、今よりもいい環境でプレーして育ってくれることを願っています。だから、選手が抜けた後、今いる選手でいいサッカーをして勝つことを目指しています。そして、さらにJクラブ移籍選手を出す。その繰り返しです。

昨年になりますが、4種の新人戦。7期生で初めて決勝に行き、レジスタSCさんと対戦しました。残り40秒というところで1対0を同点とされ、延長となり、結果は1対4。リードしている中、(タイトルを)獲れるかなと思ったんですよ。でも、上手いかないものですね……松本先生(暁司氏)がお亡くなりになって四ヶ月目のことでした。先生から「まだ勝つには早いよ」って言われたみたいで(苦笑)。

—これからも楽しみにしています。引き続き、よろしくお願いします。



# コロナ禍をきっかけに、もっと「楽しいサッカー」と交流を

～第4種委員会キッズ担当・河野雅明氏に聞く

緊急事態宣言下において、子どもたちの「遊び」が大きく制限されました。それは成長期における心身の発達、特に運動能力の発達に著しく影響を及ぼすと考えられます。キッズ年代(6～10歳)へのサッカーの普及・育成を担当している河野氏に、現状とこれかを伺いました。

## 詰め込まず、少しずつ

**河野** 2020年度は、巡回指導を63会場、指導者養成は8回行いましたが、残念ながらキッズフェスティバルは「JFA ユニクロサッカーキッズ」(10月3日)以外を中止にしました。

このコロナ禍の中、子どもたちに集まってもらうことができませんでした。小さい子どもたちは、特に集まることのできる場所がないと難しいですし、かわいそうでしたね。緊急事態宣言によって、小学校のグラウンドは使えない、公共施設の貸出も制限があり、かなりの運動制限になってしまったと思います。

それでも、それなりに動いていたと思うのですが、運動能力を見ると例年の同年齢と比べると、育っていないような気がします。4歳、5歳の幼児年代が6ヵ月も運動をしていなければ、体力的にかなり落ちているのではないのでしょうか。それでも私立の幼稚園、保育園は早めに再開しましたから、動いているのではないかと思います。

緊急事態宣言が解除され、せっかくできるようになった外遊びをもっとやらせてあげたいと思うのですが、無理な負荷をかけてしまうと逆にケガに繋がります。幼稚園や保育園に通園していれば別ですが、家の中で過ごすことが増え、公園に行くことも制限されてしまったことは、子どもたちにとってストレスになったと思いますね。

—**ゴールデンエイジに向かう中での運動制限は、少なからず影響が出るかもしれませんね。でも、焦らずということでしょうか。**

**河野** 回復力は早いと思います。ただ、今までの子どもたちと同じかといわれれば、やはり違うと考えたほうがいいでしょう。神経系が発達する時期においての制限ですから、そこは配慮しなければならぬと思います。

ということで、サッカーに限らずスポーツ、運動指導を行う際、通常だったら「ここまでできるようにになりたい」と目標を持つのですが、あくまでも「できるようにしてほしい」と目標を軟化すべきで無理に前に進めるのは危険だと思います。

子どもたちを見ていて気がかりなのは、かけっこでも縄跳びでも、継続してできる子が少なくなっていることです。もう少し言うと、できる子はできるけれど、できない子はできない。以前ならば、できない子でもそこそこできたのにと考えると、差が広がっているように思えるのです。家庭の意識、でしょうか。

—**保護者の勤務状況の変化というのも影響していませんか。リモートとなり自宅仕事をするようになった方も多くなったと思います。**

**河野** リモートで自宅にいるから積極的に「一緒に遊ぼう」という方向と、逆に「静かにしてね」という方がいらっしゃると思います。そこでの保護者の皆さんの関わり方でも、差が出ているのかもしれない。

—**そこで保護者としてはどうすればいいのでしょうか。**

**河野** やはり少しでも外に出かけて一緒に遊んでほしいですね。子どもに関わる時間が増えた方は多いと思います。少しでも一緒に遊ぶだけで違います。

ただ普段から子どもと一緒に楽しく遊んでいるご家庭の子どもは、体力はそんなに落ちていません。遊ぶことがあまり得意ではないご家庭の子どもが問題なのです。そもそも幼稚園、保育園に通う年代は体力的に差がついてしまうものですから。それこそ、6歳までのところで80～90%もの神経系が発達するのです。ここを逃してしまうと、より小学校の高学年になって差が出てしまうでしょう。

—**ということは、今回の影響というのは、現状ではなく、今が6歳くらいだとすれば5～6年後に見えてくるのかもしれないね。**

**河野** そうですね。歩く、投げる、飛ぶ、走る……中学年代では



第4種委員会キッズ担当 河野雅明氏

つきりするでしょう。バランス感覚などのコーディネーションも、小さい頃に経験したかどうかで差が出ます。現状、手遅れということではなく、まだまだコロナ禍が続くでしょうが、今年から来年に向けたここ一年が大事だと思います。子どもたちの様子を見ながら、少しずついろいろな運動をするよう導いていただきたいですね。

とはいえ、公共施設が開放されるようになり、慌てて予定を詰め込もうとしていませんか？ やはりそれが子どもたちにとってケガに繋がりますし、オーバーワーク、さらにはスポーツそのものから離れてしまう危険性もあります。

## 「サッカーをする」ではなく

—**この年代でも、オーバーワークやバーンアウトがあるようでは残念としか言いようがありません。ましてや、このコロナ禍にあって、スポーツの大切さ、身体を動かすことの重要性が叫ばれています。大人でもストレスになっているのですから、子どもたちにとっては想像できないくらいの苦痛だったと思います。ですから、ここしばらくは本当に楽しんでもらいたいですね。**

**河野** 埼玉では幼稚園、保育園の時代から子どもたちに「サッカー」をさせています。ポジションを決めて、勝ち負けにこだわり……それがこの数年「サッカーという遊びを楽しもう」という傾向になりつつあります。ユニクロなどのキッズフェスティバルによって「楽しむ」が浸透してきたように感じています。またコロナ禍となり「サッカーをする」よりも、ゴールを決める、ボールを追いかける楽しさをもっと理解してもらえ、進めていける時期が来たようにも思っています。

—**いい意味でのプレーキ的な作用となって、ここで落ち着いて方向転換してくれるといいですね。**

**河野** 指導を見ていて、若いコーチたちが勝ち負けを意識することをコントロールできるようになり、勝ち負けよりも子どもたちを楽しませようという意識が高くなったように思えます。コーチが育ってきた感じがするのです。例えばシュートを外しても「次、がんばろうね」と言えるんですよ。徐々にですがコーチたちの世代交代ができていくようにも思えます。

—**さて、with コロナ、after コロナに向けてキッズ担当として、どのように方向性を示していこうとお考えですか。**

**河野** キッズ年代では、楽しめるサッカーを目指すことが大事だと思います。JFAからは「4対4をやろう」という指針が出ています。そのほうがたくさんボールに触れるからです。今、4種同様にキッズでも8人制での試合をしています。これからのキッズは6人制、5

人制と限りなくフットサルに近くなるのではないのでしょうか。

事例として昨年度、大阪ドームでの「JFA ユニクロサッカーキッズ」は6人制で行ったという報告がありました。これまでJFAからは「8人制」という通達がありましたが、ここに来て変化がありましたので、今年度の埼玉の「JFA ユニクロサッカーキッズ」は12月25日にメットライフドームで開催しますが、6人制でやってみようと思っています。

— 実際、少子化の中で8人集めるのも大変な地域もあります。

河野 そうなんです。合同チームも増えています。小さい間は6人制でいいと思いますね。改めて思うのは、楽しいからやるんです。やるから上手くなるんです。

## 障がい者サッカー、保護者同士・指導者同士の交流も

— その他、2021年度に向けての取り組みがあればお聞かせください。

河野 やはりキッズフェスティバルに関してですが、これまでも「個人参加はできませんか？」というお問い合わせをいただいていた。ただ、これまではチーム参加のみとして、お断りしていたんですね。それを今年からは門戸を開けようと思っています。まだ応募したチームさんに入れてもらうか、それとも個人参加の子どもたちだけでチームを作ってもらうかは検討しているところですが、個人参加の子どもたちを受け入れることで幅は広がると思うんですね。

あと昨年、深谷・仙元山公園でのお祭りに呼んでいただきました。お祭りのイベントの中でキックターゲットなどを行ったのですが、評判がよかったんですね。イベントに出て行くのもありだと思っています。サッカーの試合ではありませんが、簡易ゴールを置くだけで違いますし、ボールで遊ぶというのは楽しいものです。その中で関わってくれる指導者も育ってくれるのではないのでしょうか。サッカー部には入らなかった高校生がこういうイベントを通じて指導者になってくれればうれしいですし、女性の指導者も楽しくできると思うんです。

今は指導者ならば技術がないとダメという時代ではなくなりました。知識は必要ですけどね。保父さん、保母さんたちも楽しめる場ができるといいですね。

— キッズフェスティバルの中で子どもたちだけでなく、保護者同士や指導者同士でゲームをやってもいいと思いますし、ゴールを使わな

くてもラインゴールでもいいと思いますね。あと、JFAからは障がい者サッカーとの交流も求められています。

河野 保護者同士、指導者同士でゲームは面白いですね。そういう時間があっていいと思います。また障がい者サッカーですが、小学校に上がるくらいまでに関わりを多く持てればいいと思います。今年はパラリンピックもあります。キッズフェスティバルの中で一緒にできればいいですね。

— 障がい者サッカーの皆さんとの交流が必要ですね。こちらにお呼びすることも必要ですが、私たちも活動されている現場に何う必要があると思います。特別支援学校の先生たちには、選手や審判でサッカーに関わっている方も多いです。そういう人たちとの交流、意見交換もしたいものです。あとは、実際の交流を紹介していくことでしょうか。どのように交流すればいいのかわからないでしょうか。

河野 子どもたち同士には、関われば関わったなりの成果が出ると思いますね。

— これらを実践するには、マンパワーが必要ですね。

河野 そうなんです。キッズの活動はキッズリーダーインストラクターが中心になって行っています。埼玉は登録人数は多いのですが、実際に活動してくださる方が少なくて困っています。小中高と学校の先生、福祉関係の人にキッズリーダー、キッズリーダーインストラクターのライセンスを取ってもらえるといいのですが。あと、女性がい

ない。千葉だと高校のグラウンドでキッズフェスティバルを行い、高校のサッカー部員たちが中心になってくれていますし、東京だと国士舘大学が積極的に行ってくれています。国士舘大学は大澤先生（英雄氏・学校法人国士舘理事長）が熱心ですから。

— 技術委員会が関わることで「普及」を意識していく方向性が求められますね。また今は4種の中で活動されていますが、他種別ももっと関わらなければならないと思います。もう自然とサッカー部に入ってくるという時代ではありませんから、SFA全体の課題として取り組む必要性がありますね。

河野 まずは始めてくれることから、そして続けてくれることです。普及、グラスルーツを広げていきたいですね。

— 今回もありがとうございました。



## 大会記録●県内大会

### 1種社会人

#### 2021年度彩の国カップ第26回埼玉県サッカー選手権大会予選 第2回 大学サッカー連盟杯

3月6日～27日 県内各地

東京国際大学	3	大学代表	城西大学	1	大学代表
獨協大学	0		埼玉工業大学	3	
共栄大学	0		埼玉大学	1	
平成国際大学	3		尚美学園大学	5	

※東京国際大学と尚美学園大学が2020年度彩の国カップ第26回埼玉県サッカー選手権大会に出場する



代表決定戦 東京国際大学 vs 平成国際大学



代表決定戦 尚美学園大学 vs 埼玉工業大学

## 大会記録●県外大会

### 1種

#### 日本スポーツマスターズ2021サッカー競技関東予選会

3月6日、7日 ひたちなか市総合運動公園スポーツ広場他

1回戦 埼玉県O-35選抜 0-0 神奈川県選抜 (5PK4)

代表決定戦 埼玉県O-35選抜 3-2 OVER 35千葉選抜

※関東からはエリース東京O35と埼玉県O-35選抜選抜が全国大会へ出場する



埼玉県O-35選抜

### 女子

#### 第27回選抜高校女子サッカー大会「めぬまカップ」in 熊谷

3月26日～28日 利根川総合運動公園サッカー場他

今回は全国から27校が参加(県内からは9校参加)し、毎日違う組み合わせでのトーナメントで変則的に開催されました。

詳細は、熊谷市役所ホームページをご覧ください。

## フットサル

### 第22回関東フットサルリーグ2部 Powered by PENALTY Aグループ

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
6	岩槻フットサルクラブ/tzk	0	0	0	5	7	31	-24

### 第22回関東フットサルリーグ2部 Powered by PENALTY Bグループ

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
6	烏天狗フットサルクラブ	1	0	1	4	17	24	-7

### 第11回関東女子フットサルリーグ2020 Powered by PENALTY

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
9	アンビオン	4	1	1	6	11	24	-13

## インフォメーション

### 参加費無料のオンラインセミナー

#### 『スポーツ関係者のためのOtsuka Live on Seminar ZOOM Webinar』

4月20日(火) 19時～20時30分

●講師 加藤康晴氏

立教大学コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科教授  
公益財団法人日本サッカー協会 医学委員

●演題

第1部 暑熱環境下における運動中の筋痙攣は水分補給で予防できるか?

第2部 トップアスリートのメディカルサポートについて

※申し込みの締め切りは4月18日(日)です。

申込み URL

[https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=ObPdNNB\\_AE-QQcLkf7vJ9Dm\\_JyRN8Q5Ps-cFVXQKIQZUQkISWFYyRVNXT1hOUVE4Qk9TR1JHNDJORS4u](https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=ObPdNNB_AE-QQcLkf7vJ9Dm_JyRN8Q5Ps-cFVXQKIQZUQkISWFYyRVNXT1hOUVE4Qk9TR1JHNDJORS4u)

申込み二次元コード



#### 『Otsuka 熱中症オンラインセミナー～指導者、選手、ご家族など熱中症の基礎を学びたい方へ～』

5月12日(水) 19時～19時40分

5月13日(木) 19時30分～20時10分

5月29日(土) 16時～16時40分

5月29日(土) 18時～18時40分

※4講演、全て同じ内容です。

●講師 株式会社大塚製薬工場 OS-1 事業部学術担当

●演題

「誰もがやるべき熱中症の対処方法」～水分補給の最重要ポイント～

※全4回とも先着500名で締め切りさせていただきます。

申込み二次元コード

5月12日(水) 5月13日(木) 5月29日(土) 5月29日(土)

19時～

19時30分～

16時～

18時～



※全セミナー申し込みはウェブにてお願いします。視聴はパソコン、スマートフォン、タブレットで参加できます。

## 編集後記

今回はさながら第4種特集ともなる取材記事を中心に構成しました。指導者の抱く熱い想いに共感いただき、また抱える課題を共有していただければ幸いです。

第4種はこの先の10年後、20年後を担う人材の宝庫です。第4種世代を「磨けば輝く原石」に例えた「トレジャーリーグ〜埼玉県第4種サッカーリーグ戦」が、今春15度目の開幕を迎えます。ことしは全463チームが参加するリーグ戦で、どんなチームが躍進し、どれほど選手が逞しく成長するのか、期待を込めて見守っていきたいと思います。

緊急事態宣言は解除されましたが、厳しい状況は続いています。もはや毎号の結句となっておりますが、感染予防と拡大防止へのご協力を、引き続きよろしくお願いたします。(藤田)